

「音楽実技」における“子どものために”作曲された 楽曲の導入の可能性

The Possibility of Introducing Works Composed for Children in a Musical Skills Class

児童学科 川上 健太郎* 根津 知佳子
Dept. of Child Studies Kentaro Kawakami Chikako Nezu
*日本女子大学学術研究員

抄 録 「音楽実技」(「ピアノ実技」)の授業における使用教材は、高等教育機関によって変化を富む。元来、保育士や教員を目指す学生の多くが受講する「音楽(ピアノ)実技」であるが、今日では、ピアノ初学者の増加、グループ・レッスンという授業形態がもたらす時間的制約、保育士や教員志望の学生数の減少といった諸要因により、どのような教材を授業内で使用するかを検討することは喫緊の問題である。本研究では、「音楽実技」における使用テキストから授業内で扱われている楽曲とその教材観の分析を通して今日の授業における学生が取り組むべき楽曲とは何かを再考した。その結果、“子どものために”作曲された楽曲の導入の可能性が明らかになり、その楽曲(群)の教材性や導入の妥当性についての示唆を得た。

キーワード：音楽実技、ピアノ実技、“子どものために”作曲された楽曲(群)、教材性

Abstract Teaching materials used in classes for “Musical Skills” (or “Piano Skills”) vary amongst institutions of higher education. Traditionally, students enrolled in such class were those aiming to become a nursery school or school teacher, and who have already acquired a certain degree of piano experience. However, due to the recent increase of piano beginners, restrictions on teaching time, and the decrease in number of students choosing to be a nursery school teacher or school teacher, a reconsideration of teaching materials used in the class is urgently required. This study reconsidered the musical composition that students should engage, by analyzing works such as textbooks and musical composition used in the class, focusing mainly on their teaching philosophy. As a result, it has been indicated that the introduction of work(s) composed for children is beneficial, and the implication of introducing these works in the class was justified.

Keywords: Musical Skills, Piano Skills, work(s) composed for children, nature of teaching materials

1. はじめに

児童教育系学科や教員養成系学科のカリキュラムにおける「音楽実技」や「ピアノ実技」(以下、「音楽実技」と統一して表記する)では、保育士試験や教員採用試験の際に課される試験曲を十分に弾きこなすことのできる音楽的技術の養成をそのカリキュラム上、目的の一つとしていることが多い。しかし、今日における学生のクラシック音楽離れや授業におけるピアノ初学者の増加によって授業内で扱われる

テキストや教材は、高等教育機関によっても様々である。辻・鹿戸ら(2017)による研究¹⁾では、保育士養成校におけるテキストの選択を調査・分析しているが、バイエル、バイエルを除く(一般の)ピアノ教本、養成校での使用を前提として作成されたテキストの3つに分類している。又、教員養成系学科の「音楽実技」では、高澤(1985)の研究²⁾などから『ソナチネアルバム』が導入されていること、シラバス³⁾の調査から『バイエルピアノ教本』、ブルグミュラー『25の練習曲』、『ソナチネアルバム』、『ソ

ナタアルバム』等の曲集から選曲していることが上記を含む複数校で確認された。

児童教育系学科や教員養成系学科における「音楽実技」の授業でどのようなピアノ教材を導入するべきかについての先行研究は、安江ら（2017）のバイエル教則本の研究⁴⁾や松井ら（2017）による現代のアメリカの作曲家であるギロック作品の研究⁵⁾などが挙げられるが、西洋の様々な時代様式の作品を授業でどのように取り扱うことが可能であるか言及している論文は、小田・根津ら（2019）の研究⁶⁾を除いて見られない。根津ら（2019）は、“生活の中の音楽に対する興味・関心の育成”を重視したシナリオ教材開発を進め、学生の専門領域と関連した省察を促進することで学生が楽曲に新たな視点で対峙する可能性を提言している。しかし、その研究授業で提示された楽曲は、児童学科における初学者や教員養成系学科におけるいわゆる“副科”としてピアノを受講する学生にとっては、演奏することが難しい難易度の高い楽曲や原曲の作曲者ではない編曲者によるトランスクリプションピースが大半である。そのため、作曲家自身の音楽語法によって書かれ、比較的難易度の低いもののオーセンティックな楽曲を西洋音楽の中から探求し、実際にどのような楽曲を授業内で取り上げられることが可能であるか本論文で紐解いていく。

2. 「音楽実技」の授業における現状と課題

児童教育系学科や国立大学法人を中心とした教員養成系学科のシラバスと辻・鹿戸ら（2017）による研究を基に今日の「音楽実技」の授業における現状と課題は、どのようなものであるか調査・分析する。

2-1 習熟度別におけるグレード分け

「音楽実技」では、ピアノの学習年数が学生によって異なる事例が多く、授業の円滑な進行・生徒の学びの充実度を担保するため、習熟度別に分ける事例が多く見られる⁷⁾。

また、グレードに応じて課題曲の指定や授業期間中に合格しなければならない曲数を設定している高等教育機関も存在する⁸⁾。

2-2 グループ・レッスンという授業形態による功罪

ML (Music Laboratory) 教室のような電子ピアノを設置した教室で受講者全員が各自ヘッドフォンを装

着した状態で学生の目の前にあるピアノを演奏し、教師が見回りながら指導する事例⁹⁾と前述したグレードを基にレベルごとないしはレベルの近い少数のグループを形成し、複数のレッスン担当者のもとグループ・レッスンという授業形態で授業進行する事例¹⁰⁾の2つの事例を確認できた。前者は特に、短期大学を始めとする保育士養成校に多く見られ、後者は児童教育系学科や教員養成系学科に特に見られた。教員養成系学科における「音楽実技」の授業では、芸術大学における1対1のマンツーマン・レッスンとは対照的に、少数によるグループ・レッスンが行われていることが多数である。ただ、グループを構成する学生は少数のため、一人当たりにかかる時間は児童教育系学科に比べ、確保されるケースが多いものの学生にとってレッスン時間が十分であるとは言い難い。この時間的制約の中で、生徒一人一人のピアノのテクニックや音楽的素養、芸術への知的好奇心を喚起することに努めなければならず、効率性の中にも密度の濃い授業展開が求められる。

グループ・レッスンにおける最大の利点は、他の受講生のレッスンを聴講することが出来る点である。又、教授者が学生ごとに異なる楽曲を課題として与えることによって、自身の学習していない楽曲を知覚し、音楽に対する幅広い視野・音楽観の育成にも繋がると考える。

2-3 授業内で扱われる教材の現状

辻・鹿戸ら（2017）の研究で挙げられた保育士・教員養成校向けの使用テキストに含まれる楽曲を調査すると、使用テキストに含まれる楽曲は、バイエルやツェルニーといった教則本からの選曲が高い割合を占めているといえる。その他に曲集内に弾き歌いの楽曲¹¹⁾やポピュラー音楽を含む曲集¹²⁾も散見された。

一方で、国立大学法人教員養成系学科の「音楽実技」のシラバスでは、グループ・レッスンであることは明記されているものの具体的にどのような楽曲を扱うかは、担当講師に一任されている例が多く見られ、バロック・古典派・ロマン派・近現代の異なる時代様式の楽曲をバランスよく学習することを意図した授業構成を特徴としたものが存在することが確認された¹³⁾。そのため次章では、辻・鹿戸ら（2017）の研究をもとに保育士・教員養成校において使用されていることが確認できる曲集の内容を中心に分析

し、今日における「音楽実技」で扱うことが可能な楽曲の教材観などの着想を得ることで、どのような楽曲を授業内で導入すべきか、又その妥当性を再考していく。

3. 保育士・教員養成校における使用教材（群）にみる教材観と「音楽実技」における課題再考

3-1 使用教材（群）にみる教材観

辻・鹿戸（2017）によると、ピアノ教則本を使用している教員養成校302校のうち、約60%にあたる166校がバイエル、バイエルを底本とするテキストを採択している。しかし、1.で述べたとおり、本論文では、作曲家自身の音楽語法によって書かれ、比較的難易度は低いものの“オーセンティックな楽曲”を西洋音楽の中から探求し、実際にどのような楽曲を授業内で取り上げられることが可能であるかを考察することを目的としているため、バイエルやツェルニーといった教則本以外からの選曲に着目していくつかの使用教材から考察出来る教材観や選曲の特徴について分析していく。尚、本論文では、原著が“子供”である場合も“子ども”に表記を統一する。

①バロックから近現代までの異なる時代様式の楽曲選択

バロック・古典派・ロマン派・近現代の各様式を満遍なく配している曲集は少ないが、『保育音楽のためのピアノレッスン』¹⁴⁾では、それぞれの時代様式を代表する作曲家の楽曲をバランスよく配置している。異なる様式や国民性を感じられる楽曲を取り組むことで、生徒は様式ごとの楽曲の音楽的特徴や響きの違いを無意識的、非言語的ながらも感じ取ることが出来るであろう。

②トランスクリプションピースの導入

トランスクリプション（編曲）とは、もとの演奏形態と異なった形態に楽曲を書き換えることであるが、『やさしく学べるピアノ100』¹⁵⁾や『みんなピアノだい好き！』¹⁶⁾を中心にトランスクリプションピースが充実している。これらの作品群の大半は、民謡の編曲を除けば、前者におけるピアノ独奏用に作曲された原曲の編曲、後者におけるオーケストラのために作曲された原曲の編曲が目立つ。その多くは、TVなどのメディアでも取り上げられることが多く聴き馴染みのある楽曲が多くを占めることから、編曲によって楽曲の易化がもたらす学生の学習負荷の

軽減や、原曲の演奏形態を変えてまでも学生が編曲された楽曲を“ピアノで演奏できるという行為”をより重視していることが楽曲選択のねらいとして考えられる。

③教育的意義をもつ楽曲の選択

シューマン『子どものためのアルバム 作品68』、チャイコフスキー『子どものためのアルバム 作品39』、カバレフスキー『子どものためのピアノ小曲集 作品27』といった“子どものための”といったタイトルをもつ曲集からの抜粋¹⁷⁾やそのようなタイトルは付されていないもののブルグミュラー『25のやさしい練習曲』のように子どもの音楽教育として作曲された楽曲群からの抜粋¹⁸⁾などが非常に多い。

3-2 「音楽実技」における課題再考

前述した使用教材（群）の教材観を踏まえて「音楽実技」においてどのような教材観をもって教材を選択し、導入するのが適切であるか「音楽実技」における課題を再考する。

①異なる時代様式の知覚と偏向のない選曲

教員養成校向け教本の中で、異なる時代様式を学べるよう配慮した曲集は上述したように少ないため、学生の習熟度を考慮して教授者が課題を提示することが求められる。異なる時代様式の楽曲を課題としてバランスよく与えることにより、異なる様式や国民性における楽曲間の響きの違いも最終的に知覚出来るようになるであろう。

②トランスクリプションピースの功罪

編曲とは、もとの演奏形態と異なった形態に書き換えることであるが、『みんなピアノだい好き！』の曲集内における編曲はそのタイトルだけを見れば、実用的編曲が多くを占めているように見える。実用的編曲とは、楽曲を実演する際の（主として物理的な）都合上行われる編曲を指すが、原曲の構造や意匠をなるべく損なわないように書き換えられる¹⁹⁾。ここで、曲集にふくまれるサン＝サーンス『動物の謝肉祭』より《ライオンの行進》をもとに原曲との違いを比較し考察していく。

もともと二台のピアノを含むオーケストラのために作曲された楽曲であるが、原曲では、ピアノパート左手の二拍目は、三連符で書かれているものの²⁰⁾編曲された楽曲は、8分音符に変えられている²¹⁾。

譜例1 サン=サーンス：『動物の謝肉祭』より《ライオンの行進》（1台2手）



譜例2 サン=サーンス：『動物の謝肉祭』より《ライオンの行進》（原曲）

又、楽曲の長さや構成に関しても忠実に編曲がなされているとは言い難い。これらは、ピアノ初学者の生徒の演奏技術を考慮しての判断であることは明白であるが、曲集内における他のトランスクリプションピースの大部分においても同様の問題点を分析出来ることからこれらが完全に実用的編曲をされた楽曲であるとは言い難い。R.シューマンは「立派な作曲家の曲のどこかを変えたり、削ったり、あるいはそれに流行の装飾をつけるようなことはいけないと、知りなさい。これは、芸術に対する最大の侮辱だ。」²²⁾と述べていることから、編曲者の音楽観や意匠に拠ったものでなく、作曲家による原曲の世界観を体感することを優先すべきである。

③教育的意義をもつ作品の再評価

子どものために作曲された楽曲(群)は、作曲家の作曲動機にも結び付いているように教育的意義が担保され、技術的にもピアノ初学者の子どもでも取り組むことができるものである。又、曲集内の楽曲間における難易度は、ある程度広範囲に渡ることからグループ・レッスンという形態にも適した教材であるといえる。しかし、単一曲のみを抜粋している教本も多いため、子どものために作曲された曲集内の楽曲同士の比較や曲集の全体像をある程度俯瞰出来るためには複数曲を学生に提示することが求められる。

以上の考察から、習熟度に関わらず4つの時代様式への偏向のない学習・編曲者の意匠に拠らない作曲家の音楽語法で書かれた楽曲選択の重要性・教育的意義の担保された楽曲の導入という3つの示唆を得た。又、学生にとって具体性のある教材であるために、児童教育系学科や教員養成系学科の学生の専攻領域に密接に関わる“子ども”やそのとりまく生活世界も想起出来る楽曲選択の可能性を提示したい。そこでバロックから現代までの作曲家自身のオーセンティックな音楽語法で描かれた子どものために作られた作品とはどのようなものがあるか取り上げる。

4. “子どものために” 作曲された作品の導入

4-1 18世紀～20世紀半ばまでの“子ども”という概念を背景に持つ主要なピアノ作品

バロックから現代までの音楽史の中で、“子ども”という概念をタイトルや作曲家の作曲動機における証言や記述に見いだせる主要な楽曲を以下にまとめる。表1にまとめた楽曲の他にも音楽史上にそのような作品は散見されるが、授業内で取り扱うにあたってその教材のもつ具体性や作曲家の音楽史上で果たす重要性、グループ・レッスンでの導入の可能性などを考慮した上で選曲している。

4-2 “子ども”という概念を背景にもつ楽曲の分類

表1より、子どもという概念を背景にもつ楽曲を分類すると以下の3つに分類される。

(i) 子どもの音楽的能力向上をねらいとして作曲された楽曲

子どもの（ために）というタイトルの付与の有無に関わらず、子どもの音楽教育として使用したり、子どもが演奏することを想定している場合、特定の子どものに献呈している事例も多い。“やさしい”など難易度の易しいことを示す言葉が特に付記されている楽曲もある。

(ii) 作曲家が幼少期・青年期に作曲した楽曲

作曲家の幼少期や青年期に作曲されたものではあるものの、十分に後の作品群の萌芽として捉えられる楽曲を指す。

(iii) 子どもが演奏することを目的として作曲された楽曲ではないが“子どもの”というタイトルをもつ楽曲

大人から見た子どもの生活世界を描いているが、子どもの音楽教育の向上を目的として作曲されては求められる演奏技術や表現は高度なものであるため、いない。

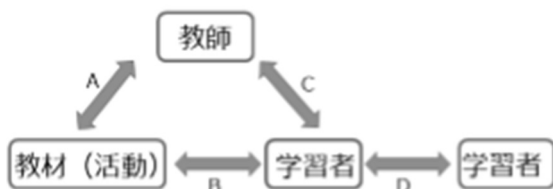
表1 18世紀～20世紀半ばまでの“子ども”という概念を背景に持つ主要なピアノ作品一覧

時代様式	作曲者	作品名	作曲年	作曲時の年齢	献呈	作曲動機/曲集の構成など
バロック	J.S.バッハ	フリーデマン・バッハの音楽帳	1720年	35才	フリーデマン・バッハ	バッハに溺愛されていた長男であるフリーデマン・バッハの音楽教育のために作曲された。12の小プレリュード、インヴェンションとシンフォニア平均律第1巻の初期稿や断片を含む。
古典派	モーツァルト	12の小品(ナンネルの楽譜帳より)	1761年	5才	—	父レオポルトが娘のナンネルの音楽教育のために用意したものが『ナンネルのための音楽帳』であるが、モーツァルト最初期の作品群がこの曲集内に収められている。
古典派	モーツァルト	ロンドン・スケッチ帳	1764年 - 1765年	8才～9才	—	父レオポルトに与えられた練習帳を与えられ、ロンドンの演奏旅行中に作曲された。43曲の小品で構成される。
ロマン派	メンデルスゾーン	6つの子供の小品 作品72	1842年	33才	L.ベネッケ E.ベネッケ	
ロマン派	メンデルスゾーン	無言歌集 第8巻 作品102より 第5番	1845年	36才		子どものための小品という副題を作曲者自身の手で記している。
ロマン派	シューマン	子供の情景 作品15	1838年	28才	—	“子どもの”というタイトルはついているものの子どもにも容易に演奏できる作品という意味はなく、大人から見た子どもの生活世界を緻密に綴って作曲した。13曲の小品で構成される。
ロマン派	シューマン	子供のためのアルバム 作品68	1848年	38才	長女マリー	長女マリーの誕生日に作曲。43曲の小品から構成される。
ロマン派	シューマン	子供のための3つのソナタ 作品118	1853年	43才	マリー、エリーゼ、ユーリエ	3人の娘のために作曲。
ロマン派	チャイコフスキー	子供のためのアルバム 作品39	1878年	38才	ダヴィドフ	作曲者の妹の家に奇遇していた際、その甥のために作曲。24曲から構成される。
近代	ドビュッシー	子供の額分	1908年	46才	クロード・エンマ	当時3才であった作曲者の娘のために作曲。6曲から構成される。子どもに演奏されることを目的として作曲された曲集ではない。
現代	プロコフィエフ	子供の音楽 作品65	1935年	44才	—	ソ連共産党による芸術家に対して明快な作品を生み出す創作活動の要求と子どものための教育的な作品を作曲することの推奨。12のやさしい小品という副題をもつ。
現代	カバレフスキー	子供のためのピアノ小曲集 作品27	1937年～1938年	33才～34才		作曲者の生徒のために作曲。30曲から構成される。1932年からモスクワ音楽院の助教授として教鞭をとる。
現代	カバレフスキー	子供のためのやさしい小品 作品39	1944年	40才		24曲から構成される。
現代	カバレフスキー	子供のためのやさしい小品 作品89	1972年	68才		35曲から構成される。
現代	バルトーク	子供のために(初版)	1908年	27才	—	シューマン『子供のためのアルバム』に触発されて作曲。初版は85曲の小品で構成されている。
現代	バルトーク	10のやさしいピアノ小品	1908年	27才		初心者のための教材の少なさを危惧していた作曲者が教育的な目的をもって作曲。
現代	バルトーク	ミクロ・コスモス	1926年～1939年	45才～58才	ペーテル(第1巻・第2巻) H.コーエン(148～153)	息子ペーテルのピアノ教則本として作曲。第1巻・第2巻は、息子に献呈している。
現代	ショスタコーヴィチ	子供の音楽帳	1944年～1945年	38才～39才	ガリーナ	娘ガリーナのために作曲し、1945年彼女自身によって初演。7曲から構成される。
現代	ショスタコーヴィチ	人形の舞曲	1952年	46才	ガリーナ	娘ガリーナのために作曲。7曲から構成される。

5 児童教育系学科や教員養成系学科におけるグループ・レッスンの授業内での“子どものための”作品の教材性と導入の可能性

前述した(i)～(iii)について、児童教育系学科や教員養成系学科におけるグループ・レッスンの授業内での導入に適した楽曲群は、生徒の専攻領域や実技レベルを考慮すると(iii)を除いた(i)、(ii)であろう。それでは、そのような作品群における楽曲の教材性とはどのようなものであるか、授業内での導入は可能であるのか根津らの研究(2017, 2018)²³⁾における授業の構造とその対話の枠組みを用いてその妥当性について紐解いていく。授業では、様々な対話が含まれているが、教材選択とは図1における教師と教材の関わりであるAを通して生じる行為と言え。子どものための作品(群)における教材性とはどのようなものであるのかまず考察していく。

図1 授業内の対話(根津, 2018)



①教育性

形式や音楽の構成・調性や和声進行・拍子など楽曲を構成する音楽の諸要素の知覚が大人のために作曲された楽曲と比べて容易である。又、楽曲を演奏する上で求められる演奏技術も高度ではなく、演奏時の身体的負担も少ないように考慮されている。曲集の中での楽曲の配列も概ね難易度順になっているものが多いため、学習の円滑な進行を促す要因となっているといえる。

②芸術性

“子どもの(ための)”というタイトルの付記によりその楽曲の芸術性が大人のための楽曲と比べて失われているかという点必ずしもそうとは言えない。作曲家自身の音楽語法で描かれた楽曲は、バイエルなどの教則本とは明らかに一線を画したものであり、芸術性を担保されているといえる。

③文化性

作曲家の楽曲を作曲するに至った経緯や時代背景といった文化的・社会的コンテキストを内包しているといえる。

④具体性

作品の中で何が描かれているのか抽象度があまりにも高い楽曲の授業内への導入は、学習者にとってハードルが高いといえる。その作品のもつ曲想や音楽的特徴から楽曲のタイトルのイメージを想起することが容易であることが必要不可欠である。

⑤比較可能性

“子どものために”作曲された作品は、小品の集合となり曲集を形成しているため、それぞれの楽曲間の違いを知覚するのに適していると言える。相異なる曲想や音楽的特徴をもつ楽曲でも同じ作曲家による音楽語法で統一されている点は、授業への導入の可能性を示唆している。また、グループ・レッスンという授業形態では、特に習熟度別によって分けられたグループである場合、同一曲をグループ全員が演奏する光景がしばしば見られるが、そのような状況を打破する可能性も秘めていると言える。

⑥学習促進性

“子どものために”作曲された作品の魅力を楽しむことで、その作曲家の大人のための楽曲を含む他の作品(群)に取り組もうという意欲を喚起する。子どものための作品の取り組みが他の作品との出会いの架け橋となり、学習者の音楽観の育成に繋がると考える。

次に、Bの《教材と学習者の対話》についてであるが学習者が教材と出会った後、どのようにその作品と向き合うことが出来るかが大切である。ここでは、シューマン『子どものためのアルバム 作品68』を例に作曲家や作品と当時の時代背景との結びつきなど表2に示したシナリオを付記することで円滑な対話の流れを創り出すことが可能であると考え²⁴⁾。

最後にDの《学習者同士の対話》についてであるが、(Cは、グループ・レッスンにおける教授者の発問や応答であり、状況に応じて様々なケースが考えられるため、本論文では論考しない)グループ・レッスンでは、同じ空間にいる学生同士の演奏の知覚

表 2 シューマン『子どものためのアルバム作品 68』におけるシナリオ

シナリオ	シナリオの教材性
シューマンは、ドイツロマン派を代表する作曲家であるが、彼の活躍した19世紀は、完成の途上にあったピアノの改良が重ねられ、市民の楽器として徐々にピアノが一般家庭に普及するようになった時代でもある。	文化性
そのような時代の中でこの曲集は、1848年に作曲されたが、1840年代のドイツの音楽的・文化的運動として家族らなどと音楽を楽しむ習慣が広まっており、“家庭音楽”という概念が浸透していたことも、子どものための作品の創作に興味を抱いたことと無縁ではない。	文化性
この曲集は、長女のマリーの7歳の誕生日を祝して着想されたが、43曲の小品から構成されている。	具体性
楽曲のタイトルのテーマは、歌・行進・情景描写・自然や四季・民族音楽など多岐に渡っているが、	芸術性/ 具体性
調性・拍子や速度・リズム・運指をはじめとする音楽的特徴は子どもの成長過程を考慮した子どもへの配慮が見られる。	教育性

と共有による学びあいを指すと言える。子どものための作品は、小品で構成されており、曲集内にはある程度広範囲に渡った難易度の楽曲が存在するため、グレードの異なる学生で構成されたグループでもこれらの楽曲の授業内への導入の可能性は妥当であるといえる。又、曲集内における異なる楽曲をグループ内の学生に課題として与えることで、教材の比較可能性という新しい視点が得られる。同時に、知覚する音楽の絶対数は自然と増加するため個人の音楽観の拡充にも繋がると言える。そのような一連の音楽体験を経て、ピアノ演奏や芸術としてのピアノ作品の魅力を感じることによって、より難易度の高い楽曲や弾けるようになりたい楽曲への挑戦という行為がうまれるが、それは教材の学習促進性に因るものと言える。

5. まとめ

以上をもって、授業内における様々な対話の構造を用いて、児童教育系学科や教員養成系学科におけ

るグループ・レッスンの授業内での“子どものために”作曲された作品の教材性と導入の可能性について論考してきたが、授業内におけるそれらの楽曲の導入は妥当であると言える。

今日の高等教育機関における「音楽実技」でどのような材を扱うべきかという議論は尽きることがない。大学や短大それぞれの学力レベルや保育士養成試験や教員採用試験を受験する学生の割合によってもその授業の質と内容はいかようにも変容する。しかし、授業で扱う教材のほとんどがバイエルのような教則本やコード伴奏によるポピュラー音楽や弾き歌いのみで構成されているのは、妥当であると言えるのだろうか。これらの教材は、一見すると生徒は、楽曲の構造や音楽の構成が明確で、親しみやすく取り組みやすいと感じるかもしれないが、前述した楽曲の教材性を内包している材であると言い難いのは、明らかである。又、授業内で扱う材の質は、グループ・レッスンという授業形態における学習者同士の対話の密度にも影響を与えるであろう。

「音楽実技」の授業への子どものための作品の導入によって、生徒はバロックから現代を代表する作曲家の作曲家自身のオーセンティックな音楽語法を通して音楽の様式感を学ぶことが出来るが、同時に、子どもと深い関係性のある専門領域にいる学生たちだからこそ、学生達一人一人が持つ“子ども観”をもって楽曲に触れてもらいたいと切に願う。

〈注〉

- 1) 辻浩美・鹿戸一範・田中麻衣：ピアノ初学者のための使用テキストの実態と傾向—全国の幼稚園教諭・保育士養成校のシラバスに基づいて— 小池学園研究紀要 15 pp.29-39 2017年
- 2) 高澤ひろみ：ピアノ学習過程における初期教材の効果的投入方法 東京学芸大学紀要 第5部門 37 pp.49-69 1985年
- 3) お茶の水女子大学シラバス「教職音楽実技Ⅰ、Ⅱ」http://tw.ao.ocha.ac.jp/Syllabus/index_search.cfm?jugyo=19E003/ 2019年9月27日閲覧
- 4) 安江真由美・松井裕樹・佐藤友衣：教員養成課程におけるピアノ実技教材『バイエル教則本』の芸術的側面に関する考察 愛知学泉大学・短期大学紀要 52 pp.93-99 2017年
- 5) 松井裕樹・松永洋介：教員養成課程におけるピアノ実技教材の考察—ギロック作品の導入と

- 効果一 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 66(1) pp.69-79 2017 年
- 6) 小田郁枝・根津知佳子他：『音楽実技』におけるシナリオ教材研究 日本女子大学紀要 第 66 号 pp.53-60 2019 年
 - 7) 前掲 お茶の水女子大学シラバス「教職音楽実技 I, II」2019 年 9 月 27 日閲覧
 - 8) 日本女子大学「音楽実技 A(B)」シラバス 2019 年
 - 9) 赤津裕子：ML システムを活用した初心者のピアノ指導における成長と課題 電子キーボード音楽研究 pp.17-26 2017 年
 - 10) 東京学芸大学シラバス「基礎ピアノ実技 I」2019 年 9 月 27 日閲覧
 - 11) 東京福祉保育専門学校：『幼稚園教諭・保育士のためのピアノ入門』ドレミ楽譜出版 2009 年
 - 12) 坪能由紀子・味府美香・片岡寛晶他：『みんなピアノだい好き！』全音楽譜出版社 2014 年
 - 13) 前掲 東京学芸大学シラバス「基礎ピアノ実技 I」
 - 14) 和泉短期大学ピアノ教育研究会：『保育音楽のためのピアノレッスン』共同音楽出版社 2005 年
 - 15) 関西地区大学音楽教育学会：『やさしく学べるピアノ 100』音楽之友社 1998 年
 - 16) 前掲 坪能由紀子・味府美香・片岡寛晶他：『みんなピアノだい好き！』
 - 17) 前掲 和泉短期大学ピアノ教育研究会：『保育音楽のためのピアノレッスン』
 - 18) 前掲 東京福祉保育専門学校：『幼稚園教諭・保育士のためのピアノ入門』
 - 19) 久保田慶一編：『キーワード 150 音楽通論』アルテスパブリッシング p.183 2011 年
 - 20) http://conquest.imsjp.info/files/imglnks/usimg/8/8/IMSLP02315-Saint-Saens_-_Carnival_of_the_Animals.pdf 2019 年 9 月 27 日閲覧
 - 21) 前掲 坪能由紀子・味府美香・片岡寛晶他：『みんなピアノだい好き！』 p.85
 - 22) シューマン著（吉田秀和訳）：『音楽と音楽家』岩波書店 p.233 2017 年
 - 23) 根津知佳子・山田康彦・森脇健夫・他 6 名：「教員養成型 PBL 教育における対話型事例シナリオの評価の開発」『三重大学高等教育研究』第 23 号 p.72 2017 年
 - 24) 多田愉可・原田宏司：「シューマンの「子どものためのピアノ作品」に関する研究－《子どものためのアルバム》Op.68 に見る「子ども観」とその背景－」広島文化学園大学学芸学部紀要 8 pp.11-25 2018 年を筆者がまとめたものである。